

掲載者の

声

体をバランスよく動かす

有賀 暁子

体はこまめに動かすことで、コリや不快感の出ない体を保つことができる。もちろん私たちは日常で体を動かしている。歩く、持つ、上る下りる、走る、座る立つ、捻る、など……

しかし、体は毎日自分の生活習慣の中にある、同じ動きを繰り返しがちである。生活の中にない動きは、意識して取り入れると、全身のバランスが取れてくる。

普段動かしていない部位は人によって様々であるが、そ



の全身のバランスを整え、しなやかな体を作るには、ラジオ体操がおすすめだ。

毎日3分少々で、全身の筋肉、関節を動かし、体の柔軟性も維持・向上することができる。

また、筋肉を動かすと血流も良くなり、全身の代謝も上がり、コリのない、疲れにくい体を保つことができる。

毎日少しでも継続して全身を動かすこと！

新しい季節、ご自分に合った方法を見つけ、全身をバランス良く動かしましょう！

(体操インストラクター)

安倍総理が打ち出した日本の「超超」長期ビジョン

飯島 勲

生まれ育った伊那谷を去り、永田町に身を投じた。いまでも総理官邸に日々精勤、日本の政治をそのど真ん中から観察すること、半世紀近くになる。

そんな私から見て、前代未聞のことが起きた。

いつ成し遂げられるかわからない超長期の課題を、安倍総理が、それでも敢然として打ち出したことである。

目先にのみ課題を設け、できなかつたと批判されては、衆議院解散、総選挙に打って出るのが、歴代政権の通例だった。そのせいで、衆院が四年の任期を無事満了させた前例は、戦後ただ一度、三木内閣の時しかない。日本の政治は、ともかくせわしない。

驚いたのは、安倍総理が、「超」長射程の矢を放ったことだ。名目GDPを百兆円以上増やし六百兆円にする、介

護離職をゼロにし、出生率を一・四二から一・八に上げるとする「新・三本の矢」を、約束に掲げたことである。

しかも、これらの実施によって「五十年後に一億人の人口を保つ」という、「超超」長期ビジョンすら出た。担当大臣まで置いたのだから、どこまでも本気である。戦後はおろか戦前に例を求めても、これだけ長期に狙いを定めた政権は前例がない。

いま日本中で、出産適齢期に当たる二十〜三十九歳の女性が減り続けている。この先二十五年すると、子どもを産む年代の女性が五割以上減る市町村の数は、全国総数の約半分、八九六に及ぶ。うち五二三市町村では人口が一万人を切り、自治体「消滅」に至る。

とそんな、衝撃的推計がある。新・三本の矢は、「放つしかない矢」だった。真正面から取り組む政治家が、安倍総理まで現れなかったということ、わたしはむしろ驚くべきだったのである。

郷里に向けクルマを疾駆させる度、ふるさとの慈しみを思う。過去三十年余り人口を維持した伊那市は、立派な町だ。これからの大波も、衆知を集めれば乗り切れる。超超長期のビジョンを、伊那市も描く時が来た。打ち出して、全国自治体をあつと言わせてくれる日を待ち望んでいる。

(内閣参与)



脛の傷

井口 昭久

蜂の子は今では信州の特産品として高値で販売されているが昔は貴重な蛋白源であった。蜂の子の巣を探すには高度な技術と体力が必要であった。

大人たちが里山にでかけて餌を仕掛けて蜂を待った。餌は田圃で捕まえたカエルの太ももであった。太ももの筋肉には先端をよじって細くした真綿がついていた。蜂がカエルの大腿筋肉を咬えて巣に持ち帰ると、真綿も一緒に運ぶ仕掛けになっていた。

そんな仕掛けを知らぬ蜂はカエルの肉の匂いに誘われて集まってきた。真綿を吊るした餌を人の手掌で器用に咬えさせると蜂は灌木の間を抜けて大空へ飛び立った。

真綿をぶら下げたままゆらゆら揺れながら空中を舞った。真綿を目印にして蜂を追いかけるのが蜂の巣探しであった。

蜂は地上の都合は無視して飛ぶ。人は空中に舞う白い物体をひたすら追い求めた。地上の障害物を避けている余裕はなかった。大人たちは夢中になった。空間を飛ぶ蜂に障害はないが、追う人間が走る地上は危険に満ちていた。

その頃の子供には遊び道具はマルケンにビーダマ、楽器は木琴とハーモニカしかなかった。子供たちは大人の真似をして遊びたがった。しかし危険な蜂追いは親により禁止されていた。

私は小学校5年生の時に大人に混じって蜂を追った。ひたすら上を見て走ったので右の脛がアカシヤの木の株に突き刺さった。カエルの筋肉のように臓器が丸見えになった。強烈な痛みが走り出血をした。しかし、叱られるのを恐れて大人たちには内緒にしていた。傷は赤くなり熱を持ち化膿していった。子供心にも命の危険を感じたが母親に助けを求めることはなかった。その頃の死因で多かったのは女性はお産であり、男性は事故で、

子供は感染症であった。私の脛の傷は抗生物質による治療を受ければ簡単に治癒するが、放置すれば大自然の動物のようになり死ぬ危険性さえあった。傷跡は中学生になっても消えなかった。

そして私は今、その頃とは似ても似つかぬ顔となり肉体を持つようになった。

(名古屋大学名誉教授・愛知淑徳大学教授)



挿絵 茶畑

戦病死した父親の慰霊の旅

伊藤 喜良

昨年は中国に旅行した。父親が終戦直後の昭和20年12月に中国湖北省武昌(現武漢)で戦病死したのであるが、その最後の場所が第183兵站病院というのを知り、武昌(武漢)へ行き、その跡地を尋ねて慰霊をしようと考えたのである。また戦後70年ということもあり、まだ自分が健康なうちにという思いもあった。ただ、この兵站病院の場所について武昌のどこにあったか、厚生省、防衛省防衛研究所、長野県庁等に問い合わせてもどうしても正確な場所が分からなかった。長野県庁に保存されていた父親の軍歴は、昭和19年4月15日に臨時召集され鉄道第15連隊に応召したとのこと(私は生れたばかりの0歳)。この時父親は35歳で、徴兵検査は「乙二」(内蔵に欠陥があった)で本来兵役は免除されるべきものであ

ったが、消耗品として敗戦濃厚なときに狩り出されたのである。同軍歴によれば、父親(旧美和村、現伊那市長谷に居住していた)は大工であったので同年5月2日に九州博多から朝鮮釜山にわたり、そこから北上して「満州」にいたり、工兵として鉄道建設に関わりながら南下して武昌を経由してベトナム近くの「南支」までいたり、敗戦直前に「中支」武昌に帰り、敗戦後の昭和20年11月18日に発病して入院、12月11日に武昌の183兵站病院で「脚気ならびにコレラ」で死去したと記されている。死因はたぶん栄養失調ではなかったかと推測される。なお、軍の階級は当初の二等兵から上等兵になり、死去した後は兵長に昇進している。30代半ばの二等兵はさぞ苦労が多かったことと思われる。

日本では兵站病院の跡地が分からなかったが(武漢大学から日本に留学している人の話から同大学の構内ではと推定していた)、現地に行けばな

んとかなるのではないかと淡い期待を持って次男とともに武漢に赴いたところ、武漢大学構内の「武漢の桜の名所」がそこではないか思われると現地の案内人の方がいうのである。彼のいうところによれば、この桜の名所は戦時中に

日本軍の病院があったところであり、この桜は入院していた傷病兵の心を慰めるために日本から取り寄せたものであるというのである。このようなことから183兵站病院の跡地は武漢大学の構内ではないかと思ひ、そこで日本に残された妻や子供3人を案じて異国で死去した父親を偲び、冥福を祈ってきたのである。

旅行したのは中国の抗日戦争勝利70年の記念行事の直後であったので、「抗日勝利」等の様々なスローガンが掲げられて溢れており、いかにも現代の「大国」中国の状況を示すものであったが、感覚的にいってこれらのスローガンが民衆の間にどれほど入っているか分からなかった。武漢の市街は表通りに超高層ビル

が立ち並び、近代的都市であったが、裏通りにはいけばまったく違う世界が存在していた。そのアンバランスが興味深かったが、都市そのものは日本の高度経済成長期のようにエネルギーに溢れており、懐かしい思いをした。

日本に帰国すると、「安本法」が多くの人々の抗議・反対の声を無視して国会で強行裁決されようとしているところであった。現代日本の状況をかんがみて、戦死した近親者を慰霊する旅などは我々の世代で終わりにするような政治を望むものである。

(福島大学名誉教授)



年越し、正月、母親のあかぎれ

井口 武雄

結婚して東京で初めて向かえた年越しと正月、余りに実家と違うのにびっくりした。年越しは蕎麦だけ、他の食べ物は普段と同じ。毎年大晦日に炬燵で食べた鰯の照り焼きは影も形もない。

元旦はお雑煮、これは伊那とほとんど変わりはなくまたおせち料理も朝酒の肴として美味しい。二日の朝、伊那と決定的に違う食べ物に会うことになる。またお雑煮だ。二日の朝は長芋汁を口の周りがかゆいかゆいと言いながら楽しんだのに。三日の朝もお雑煮、東京では三ガ日の朝はお雑煮と決まっているとのこと。美味しいおせち料理も三日間朝・夜と続くと少し飽きてくる。三日の朝の実家の白いご飯とお葉漬けが懐しくなる。テレビで日本各地の正月料理を紹介しているが、所変わ

れば・・・でそれぞれに土地の謂れや特産に違いがあるのが面白い。

ところで伊那で年越し料理や正月料理を楽しんだ後のことを思い出すと胸が痛くなる。最近朝早く家を出て会社に行くことや夜のお客様との会食も少なくなつたので家の食事の後食器洗いなどをする必要がある。有り難いことに水道からはお湯が出てくる。冷たいと思うことはない。

子供の頃の我が家には温水器が着いておらず全ての食器を冷たい水で洗っていた。食器用の洗剤もなかった。冬の母親の悩みの一つはあかぎれであった。一日三度は手を入れるのも嫌になるような水で鍋、釜、食器を洗わなければならなかったから。今では伊那のほとんどの家庭に温水器高性能の洗剤、更には食器洗い器があり、冬中あかぎれに悩む人はほとんどいないと思う。「母さんのあかぎれ痛い、生味噌すりこむ・・・」の意味を知らない子供がほとんどではないだろうか。家庭の主

婦のご苦労が減っていくことを本当に嬉しく思う。

(三井住友海上火災保険株式会社
シニアアドバイザー)



ふるさと納税で伊那市百年の計を

大羽 繁

平成27年の伊那市へのふるさと納税は、前年度の実績を飛躍的に上回ったと聞き、ふるさと公使としてお手伝いをさせてもらった一人として大変嬉しく思っています。

更にこの成果を維持発展させるために、少しばかり提言させてもらいます。昨今この制度は景品を競い合う傾向があり、本来の目的と離れているとの批判がありますが、伊

那市の特産品を景品として活用することは、地元特産品の宣伝、発掘、更には地元産業の活性化につながると思いますが、大いに活用するべきだと思います。

又長い目で見るならば、伊那市は南アルプス、中央アルプスに囲まれた山岳都市としての特徴と良さを全国に発信し、協力を求めたらと思います。自然環境の保護、伊那市100年の計を考える時、「木を植えて育てる」運動を提案します。私達が育った小学生時代は、学有林があり、春は苗木を植え、夏は下草刈りに精を出したものです。又各集落には鎮守の森があつて大木や名木と親しむことが出来ました。

岩手のカキの養殖業者である畠山さんは、「森は海の恋人」と提言し、カキや海産物が豊富に育つために森林の果たす役割を重視し水源地での植林運動を実施し成果を挙げました。

私たちが在京の長谷出身者の有志は、ふる里長谷に楓や桜、ケヤキ等の苗木代を毎年送り

続け地元の皆さんに各地に植林してもらい、管理を続けてもらって20余年が経ちました。今ではこれらの木は立派に成長し、見映えがする様になりました。とりわけ美和ダム周辺の紅葉は見事なもので多くの人々に楽しんでもらっています。私たちの活動はごくささやかなものですが、伊那市の各地でこうした運動が広がります。森林が出来れば、次の世代の人々にとって大きな財産になると思います。又この運動は、伊那市出身者だけでなく、全国の森や自然を愛する人々からも協力が見られるものと確信します。

(東京長谷人会相談役)



仙台にある藤村歌碑

蟹澤 聰史

信州と仙台との関係は前にも触れたが、今回は二つの藤村歌碑について紹介する。島崎藤村は明治二十九年、仙台の東北学院に赴任し、一年足らずだったが教鞭を執り、その間に『若菜集』を公刊した。藤村の『合本第十六版の序』には「明治二十九年の秋、私は仙臺へ行った。あの東北の古い静かな都會で私は一年ばかりを送った。私の生涯はそこへ行って初めて夜が明けたやうな気がした。私は仙臺の客舎で書いた詩稿を毎月東京へ送って、……」とある。そして「心の宿の宮城野よ／乱れて熱き吾身には／日影も薄く草枯れて／荒れたる野こそうれしけれ　ひとりさみしき吾耳は／吹く北風を琴と聴き／悲み深き吾目には／色なき石も花と見き」と続く。

昭和十一年に藤村の歌碑が、東北帝大土井光知教授らによつて、私の住んでいる八木山

に建てられた。もともと、詩に詠われている宮城野が候補だったが、当時は軍用地のため許可されず、海の見える八木山が選ばれたようだ。そこに動物公園が建設されることとなり、昭和四十二年には青葉城に移され、さらに平成十九年には、仙台駅東口の近く、以前藤村が下宿していた三浦屋の跡地に三度目の移設となり現在に至っている。歌碑にはここに引用した詩文が刻まれている(写真1)。

さらに、藤村文学を愛し荒浜に生まれ育った末永喜一氏は私費をもつて「とほくきこゆるはるのしほのね」と詠われた「潮音」詩碑を建立した。山国育ちの藤村が荒浜で初めて大洋を望み、「潮音」を創ったのに感激したという。五年前の津波で荒浜は壊滅的な被害を受け、この詩碑も傷ついた。しかし震災遺構の意味も含めて、そのままの姿でここに移設されている(写真2)。

父が旧制松本中学校時代に買った『藤村詩集』大正九年七十版春陽堂が手もとにあり、

先の文章はそこからの引用。大正デモクラシーの洗礼を受けた父は、叙情的な藤村の詩を好んだようで、息子がこの歌碑を見ながらいささかの感傷に耽っている。天災のことも忘れまい。

(東北大学名誉教授)



(写真1) 名掛丁藤村歌碑



(写真2) 傷ついた潮音の歌碑

もう少し、もらつて
おけば良かった！

上岡 実弥子

この一年、実家にちよくちよく帰っていました。

実家に帰る楽しみは、家族と話すことです。皆の近況を聞いたり、こちらの近況を話したりすると、気持ちがほっこりします。甥や姪がどんどん大きくなるのも楽しみです。加えて、帰省で楽しみなのは「野菜がもらえる」ことです。

私は、好き嫌いなく何でも食べますが、ひとときわ野菜が好きです。お酒のアテにかぼちゃ煮や、ぶり大根など、最高ですね！

そこで、帰省の際は「なんでもいいから野菜ちょうだい♪」とねだります。

実家は専業農家。食べる野菜は、おおかた自分で作りまします。加えて、親族から頂く野菜が、これまた充実しています。

「これ、持ってかし」

「〇〇の大根だで」

「〇〇のアスパラだに。『実弥子ちゃんに持たせてやって』って持って来てくれたで」など、親戚が気づかってくれるのも有難い限りです。

加えて、これらの野菜が、こちらで買う野菜とはくらべものにならないほど、美味しい。

「ちよつとオ！こないだもらつてつた大根、すつごく美味しかった」

「ありやあ、〇〇で作った大根だわ」

「へえ、〇〇じゃ、大根を出荷してるの？」

「しとらんよ」

「えっ？ 売り物でもないのに、あんなに美味しいの？」というところが、頻繁にあります。

帰省の際は、夫の車で行くので、野菜はしこたま頂きたいところ。が、悲しいかなオトナ二人の所帯では、そんなに食べられません。さらに、日頃、『白菜4分の1カット』など、食べる量だけ買うチマチマした生活を送っていると、

「捨てたらもったいない」という考えが邪魔をして、大量にもらえないのです。先日、「なんだえ、それしか持つてかんのかえ。はりこみ悪いなえ」

と嘆く親を尻目に、食べられる分量の野菜をもらいました。帰宅後、食べたところ、そのみずみずしくて美味しいこと！

「やつぱり、もう少しもらつておけば良かった」

「そうざら」

そんな会話を、帰省のたびに繰り返しているのです。

(株式会社キャラウィット代表取締役)



NHKの大河ドラマ

真田丸の見どころ

唐木 淨治

今年のNHK大河ドラマは「真田丸」に決まり、平成28年1月から毎週日曜日の午後8時からスタートされました。この真田丸によって、信州上田城を三代の真田一族が守り続けた伝説の物語であります。とくに、大阪の冬の陣と夏の陣で徳川家康と戦った「目の本の一のつわもの」と云われ、その名を天下にとどろかした真田幸村の生きざまを垣間みることが出来ます。

とりわけ、戦国時代の荒波に武田信玄・織田信長・上杉謙信・徳川家康などの大国の武將に囲まれていた信州信濃の小国であるが故に真田一族の力強い絆と、家来の真田十勇士の結束によって、信州人特有の気質がよりよく育ぐくまれてきたと云われています。この信州人特有の気質の原点が、高遠藩の学問所として設

立された「進徳館」(しんとくかん)にあると云っている信州人が多いようであります。

ところで、この進徳館は、文政時代の高遠藩主の内藤頼直が実際に役立つ学問と人材育成をむねとした「知行合一」の教育をめざして、高遠城内にあった内藤蔵人の屋敷を改造して藩の学問所として開設されたようであります。

そして、この高遠藩主の保科正之(ほしなまさゆき)が設立した際に高遠藩内から多くの藩士を引きつれて会津若松の3万石の大藩へと移封され、その後「保科」の姓から「松平」姓を名乗りましたことと、その後に白虎隊の若もの自決と、藩士の自がいによって明治維新を迎えることになったことは、多くのテレビや映画などのドラマによって語りつがれております。

このように真田一族も武田信玄・勝頼親子の血縁関係にあったことによって、信州人の気質も育ぐくまれて真田一族の結束の絆を生んだことが理解されたものと思います。



とくに、その顕著なことは武田勝頼が織田信長を恐れて高遠城の藩士をとんでももて玉砕するとともに、17才の若さで初陣をかざって信長に向け自がいして内臓を壁に投げつけた伝説によって信州人の気質をさらに深く知ることが出来るものと思います。

(NPO法人理事長・弁理士)

私のお母さん

北原 巖男

ことしも各学校で卒業式が行われ、それぞれが新しい出発を迎えようとしています。全国各地の高校を卒業した公益財団法人古岡奨学会の奨学生の皆さんが書いた卒業文集が僕の手元に届きました。三年間の思い出がいっぱい詰まっています。

古岡奨学会は、学習研究社(学研)の創業者古岡秀人さんが、高校で学ぶことが経済的に困難と認められる母子家庭の子女の皆さんに学費の一部を奨学金として支援するため、一九八〇年に私財を投入して立ち上げました。古岡さん自身、五歳のとき筑豊炭田の坑内事故でお父さんを失い、貧苦の生活の中、お母さんに女手一つで育てられました。これまで七二九六名の奨学生が誕生し、今春は二三五名が卒業しました。この中には長野県下の高校生四名がいます。

す。

その四名の卒業文集のテーマは、いずれも「私のお母さん」。

Aさん「お年玉も、友人に比べたら笑ってしまいうくらいだけれど、大して劣等感などありません。むしろ感謝しています。きっと他人よりお金はないのだろうけれど、母が元気でいてくれれば良いと願っています。」

Bさん「私が物心ついた頃から、父はいませんでした。でも母と祖父母はそれが嫌だと思わないほど楽しくここまで育ててくれました。こんな子に育っちゃってごめんね。一緒にいる時間が大好きです。これからよろしくね。」

Cさん「たくさん我慢をしてくれている母のおかげで私は、自分のやりたい事を何なく自由なくさせてもらっている。私は、母に守られている世界から、母の隣に立つ、以前のように白い手をした母を背負う、そんな世界へ踏み出していく。」

Dさん「私にとって母は、目

標とか理想とかいろいろあるけれど、とりあえずあんな風になりたい。「この野郎が！」と思うことも山ほどあるけど、やっぱりあいう人になりたい。何書いたかよく分からないけれど、私の母は本当にものすごく大好きなんて言葉では言い表せないのだ、という話。」

お母さん、ご卒業おめでとうございます！
(付記)奨学生の文集を読み進めていますと、僕のふるさと高遠町荊口で執筆活動に取り組んでいる東 朔水(あずまさくみ)氏が「ひぐらし神社、営業中」(ポプラ社)で作りに出している「真実」が彷彿としてよみがえり、一緒になって心のエネルギーをもらうようです。

(元駐東ティモール日本大使・一般社団法人 日本東ティモール協会会長)

チャレンジし続けて

北原 照久

母が高遠出身だった縁で、伊那市芸術文化大使を務めています。

僕は東京の京橋生まれで、両親は戦前にミルクホールを戦後に喫茶店とスポーツ店を営んでいました。いつか両親がやっていったようなミルクホールをもう一度やりたいとずっと思っていたのですが、今年の終わり頃には、同じ京橋の地でやっと再現できる予定です。父や母も喜んでくれると思います。こうして母を思う時にはいつも、母が好きだった高遠の桜を思い出し、一緒に行った高遠への旅を思い出して、また桜の季節に高遠へ行きたいと思うのです。

ところが残念なことに、今年の桜のシーズンも横浜を離れることができそうもありません。4月にアメリカカングラフティをイメージしたミュージウムを、千葉県の大田にオー



ブンする予定なので、その準備、そしてグラントオープンとなるからです。

1950年代、テレビを通してアメリカを知り、多くの人たちが憧れたアメリカ。僕も強く憧れて、そのアメリカを象徴するようなものもコレクションしてきました。ミュージアムの入口ではピンクのキャデラックが皆さんをカッコよく迎え、ミニカーを多数展示し、モーションディスプレイという宝飾店のウインドーに飾られていた動く人形たちも楽しんでいただけるよう考案中です。機会がありましたら皆さんもお出かけください。

(株)トイズ代表取締役



「戸台の化石」新たな発見 ―入野谷紀行 7―

北村 健治

戸台地域を歩き始めてすでに五〇年を越えた。戸台という地名を知り、一九六七(昭和三七)年大雪の正月にはじめて戸台を訪ねて、戸台のトリゴニア(三角貝)化石と初対面した。歩き始めて二年目にアンモナイトを発見した。赤石山地では初めてのことであった。以来これらの「戸台の化石」を訪ねて毎年往來することとなった。軟体動物・棘皮動物・腔腸動物・腕足動物など産出する化石は多岐にわたる属種と膨大な標本数となった。砂岩から産出するトリゴニア化石は比較的潰れていないのに、泥岩から産出するアンモナイトはペチャンコに潰れていて、ほぼ丸いはずの側面観がゆがんだ楕円形をしている。アンモナイトは化石として保存されてから現在までにさまざまな体験をしたことだ

ろう。この「戸台の化石」の地質時代は、中生代白亜紀前期アプチアン期(約一億一千万年前)とされている。一億年前と言えど日本列島はまだ形がまったく出来ていない。大陸東岸に広がる西太平洋の大陸棚では、どんな自然が展開されていたのだろう。これらの謎解きには日本列島周辺から産出する多くの古生代や中生代のいろいろな化石たちからヒントを教えてもらうしか方法がない。



「戸台の化石」として産出する多くの化石には、歴史的に存在感のあるトリゴニア、化石産出層の時代を検討させてくれたアンモナイト、現生

種の研究もまだ残されている棘皮動物のウニ化石やウミユリ化石なども間もなく産出するようになった。ことにウミユリ化石はなぜかアンモナイトと共産する。トリゴニア以外の二枚貝類も多種類の産出が明らかになり、淡水・汽水棲の属種の産出も確認されて、「戸台の化石」の産出層の地質時代が白亜紀前期オセリビアン期(約一億二千万年前)へと少々長くなった。さらに腔腸動物のサンゴ化石も最近産出するようになった。

また、以前から産出していた植物化石も実に多彩であり、多くのシダ植物やソテツなどの仲間たちとは別に、恐竜などの生息環境を彷彿とさせるマングローブ植物の化石産出も確認されている。化石学会での質問にも、「戸台からは恐竜は出ないでしょうか」と聞かれる。新たな発見の可能性もゼロではない。いつの日か赤石山地から「恐竜発見」とのニュースの流れることを期待している。

「戸台の化石」保存会では

発足三〇年を迎えた今年も六月には三峰川石ころウォッチング、八・十一月には化石採集会が企画実施される。20160107K、青梅にて。

「戸台の化石」保存会会長
(写真はアンモナイトと共産する五角ウミユリの破片二角張った穴)



新年を迎えて思う

木下 嘉隆

昨年の夏頃から懸念されていた中国経済減速がより現実となり、更に低下傾向が止まらない原油安や不安定さを増す中東情勢が重なり、世界的

な同時株安と円高で荒れた2016年がスタートしました。アベノミックスにより、この3年間、政治的安定（長期政権）、円安、株高、企業業績・雇用改善などの成果を上げて来た安倍政権には、さあ、これからというときに急ブレーキなど掛からぬようにお願いしたいと思います。

さて、昨年は驚くような不祥事がたくさんありました。杭打ちデータ偽装によるマンション傾き、免震ゴム偽装、食材期限偽装に異物混入問題のあった食品、前代未聞の大企業の不正会計発覚、世界トップメーカーの自動車排ガス不正など記憶に留めていらつしやる方も多いかと思えます。いずれも世界的な一流企業が行った不正です。「2015年今年の漢字」は「安」が一位を獲得しましたが、個人的には「偽」に一票を入りたい気持ちでした。これらの不祥事が起こった原因は様々ですが、私には成長を追い求め過ぎて何か限界を超えるような行き過ぎたことをやってしまい、

遂には不正にまで手を染めてしまったのでは無いかと思えてなりません。最近の不祥事や事件の多くは、この「行き過ぎて超えてはいけない限界を超えてしまい、その結果崩壊してしまう」的なことが色々なレベルで安易に起こっているように見えます。

国、県、市町村を発展させるためには経済成長は必要だと思えます。しかし、戦後、類ない高度経済成長を遂げた時代と現在、私たちの置かれている状況では随分と違っています。日本人の人口が減少傾向に転じて丁度10年が経ち、急速に進む少子高齢化、縮小する国内市場などを考えると、エネルギーや資源などを大量に消費して物的な豊かさを追求しひたすら成長していくモデルは現実的ではないと思えます。もっと質を重視した人々が豊かであると感じられる新しい「こと」や「もの」を考えていく必要があるのではないかと思います。「成熟国家」「成熟社会」なる言葉が今から40年も前の197

0年代初期に流行したそうです。その背景は良くわかりませんが、過去に議論されたこれらの言葉の意味や概念をもう一度検討し、「成熟国家／社会」としてどうやって発展させていくのか、私達が生活する市町村レベルから真剣に考えていくことが大切ではないかと思えます。

昨年12月から今世紀最大の事業とも言われる中央リニア新幹線の南アルプスを貫くトンネル工事が本格的に着手されたとのこと、「行き過ぎ」の無いように行政の目を光らせていただきたいと思います。（マイクロンメモリジャパン株式会社 代表取締役社長 氏）



川端での母のひと言

河野 實

実家には川端がある。水は上流の中殿島の春近神社下で湧き出る清水だった。

昔の川端は生活の場所だった。母は野菜を一日中洗っていたこともあった。風呂の水は伊那市営水道ができるまで、この川端から汲み上げていた。川端の隅には超ミニサイズの池があつて、夏はトマトやスイカを入れて冷やしていた。

この川端では、いつも母は軒先で早朝から、タライと洗濯板で洗濯したものを濯いでいた。母にとって川端は重労働の場所だった。何しろ4人の男の子たちは、日々着ているものを汚しまくっていたのだから。

川端は隣家の畑と接していた。ある春の休みの日に、いつものように洗濯物を濯いでいると、隣家の婆さんが泥ネ

ギを持ったまま、母に何やら話し掛けてきた。

「おめえさんとこは5人もボコたちばつかしで、洗濯するのめてえへんズラ」

気丈な母は、手を休めずに「5人も産んでも、子供はみんな育つものではねえから、今は我慢して育てるしかねえ」と思つとるに。何人欠けるか分んねえけれど、また、戦争があれば兵隊にもとられるでねえ」と言い放った。

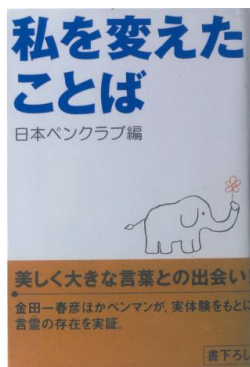
これを川端の横で聞いていた10歳のボクは、強烈なショックを受けた。「子供は全部育つものではない」から、5人も産んだといった。その晩、ボクは寝返りばかりを打って、熟睡できなかった。ボクが自分の生と死に目覚めた瞬間だった。

それから間もなく、信州で元旦に生まれた末弟が、2月6日肺炎で急死してしまった。当時、囲炉裏と炬燵しか暖房のない氷点下15℃の朝だった。母は出棺前に小さな棺桶に入れられた末息子を抱きしめ離さなかった。欠ける覚悟

などなかったのである。

この話を日本ペンクラブ会員競作（アンソロジー）に書き、2位を獲得した。それが入選作30篇で出版された「私を変えた言葉」（光文社刊）である。

（ノンフィクション作家）



ふるさとの友から贈られてきた一冊の本

酒井 秋男

昭和十七年（一九四二）生れの私はふるさとを離れて五十四年になる。先日、高校（上伊那農業高等学校、上農）の同級生から一冊の本が贈られてきた。この本の著者宮原君は同じ伊那市の農家の長男として生まれ、将来の農業発展のために上農に進学した仲間である。

題は「農に生きる」で、彼が農業の激変期に将来の農業に大きな夢と希望を抱いて上農に進学したが、結果的には早稲田大学に進学し、ふるさとに帰郷し高校の社会科教師として県内の高校に勤めながら定年退職を迎え、「定年帰農」した一農夫のつぶやきの本で、内容はこれからの日本の農業にとって実に含蓄のある本である。

日本が第二次世界大戦で敗れ、終戦を迎えたのが一九四

五年であるから、私達の幼少期は日本全体が貧乏のどん底にあった。当時の教育は、義務教育が終わるとほとんどの子供達は就職し、高校まで進学できたのはほんの僅か、ましてや大学まで進学できたのは裕福な家庭に育った子供のみであった。そんな状況下で、上農に進学できただけでも幸せな青春時代であった。将来の農業に大きな夢と希望を抱いて進学した高校時代も、いざ卒業となると農業情勢は一変し、「これからの農業は大型トラクターで耕す」という農業の近代化が叫ばれ、専業農家として続けるには少なくとも二・三町歩以上の耕地面積が必要とされた。これは当時の池田勇人内閣による所得倍增計画によるもので、これを進めるために農業基本法を公布し、必要な労働力を確保するために農業人口を削減する政策の一環であった。何れにしても我々のように将来の農業に大きな夢と希望を抱いて農業高校へ進学した者達にとっては大きなショックであ

った。著者の宮原君は2町歩前後の耕地を持つ専業農家であったため、上農を卒業と同時に県立農業講習所（現農業大学校）に進学し、農業改良普及員や農業技術員を目指した。しかし、当時進められていた農業政策を知るにつけ、将来の農業に希望を見い出せず数か月の浪人生活を経て早稲田大学に進学した。

一方、私の方は我が家の農業規模から大学進学は無理であったが、高校の担任の先生の奨めによって当時新設された特別奨学金のお蔭で大学への道が開け、宮原君と同じ地域教師の道を目指したのであった。

（松本大学教授）



郷言葉と幼少期の狭い世界

酒井 汀

伊那を出てから諸所を転々として六十余年、郷言葉はほとんど使わなくなっている。しかしつい口から洩れる言葉がある。例えば野球（放送）で打ち取ったはずの飛球を野手が落とした時「アッ、バカッ」、そして逆転で惜敗した時の「チキショウ」などである。本気の悪意はないつもりだし、自分の失敗にも「バカ（だった）」と自嘲するが、聞いた妻子は、もの凄く下品だという。確かに、高名な先輩の口からその言葉が洩れるのを偶然聞いたときは、懐かしさや親しみと同時に違和感を覚えたものだ。

「バカ」は、単に「違う」という意味でも使われていた。以前に帰省した時、重い荷物を背負っていた幼児に「重いア。頑張ってるじゃん。」と褒めたら、無邪気な口調で「バ

「カ」と返されたことがある。
「重くなんかねえわ。」という
意味で、私も昔よく使ったも
のだ。相手が目上の場合「バ
カッテエ」と言えば少しは敬
語になった。今そのような語
法は残っているだろうか？

育ったころ集落内の男児は
年齢ばらばらの数人だけで、
遊びといっても、釜ん場とい
う狭い平地で走り、受けっこ
(キャッチボール)、里山で木
登り、チャンバラぐらいで、
少人数でもあり、すぐに飽き
た。鬱屈は、理由もなく他集
落に向かうことがあった。「○
○(隣村)小僧たち、喧嘩に
来い！」とか、「○○小僧たち、
どいらし殴れ、雲の上までぶ
ち上げる トコ、トンヤレト
ンヤレ」などと伝承の節回し
で囃したてると氣勢が上がり
退屈が紛れた。当時「鬼畜米
英」との戦争中でもあり、排
他的で狭い世界であった。そ
の後年齢と諸所での生活(修
行?)を重ね、日本社会の変
動も幸いして何とか無事に過
ごしてきた。

人間の社会性は、家庭・近



隣から学校・職場、地域社会、
更には国家、人類、地球規模
へと広がるようだ。その発達
が未熟で排他的な段階に固着
し、狭い世界での鬱屈に心が
圧倒されてしまうと、「いじ
め」、非行・犯罪、差別、国際
紛争などに向かうと考えられ
る。

（元・大阪少年鑑別所長

今の伊那の子供たちは、文
化やメディアや教育の革新で、
私どもよりずっと高度の社会
性を育んでいるにちがいない。

高遠石工の足跡

笹本 正治

今年の大河ドラマは「真田
丸」。この影響で真田氏ゆかり
の地は大賑わいです。私は戦
国時代の研究をしており、『真
田氏三代』という本も書いた
ことがあるので、講演の問い
合わせが多いのですが、でき
るだけ断るようにしています。
しかし、断り切れないものも
あり、昨年真田氏ゆかりの地
の案内をしました。

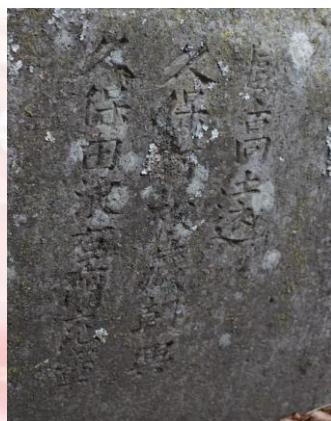
探訪地の一つに真田氏が崇
敬した上田市真田町の山家神
社もありました。いつもは本
殿しか目を向けないのですが、
境内に入っていくと、左手に
嘉永七年(一八五四)にでき
た大きな石製の「仁王護国般
若経供養塔」が鎮座していま
した。石室が柔らかいためか
だいぶ痛んでいます。文字
の見事さ、それを囲む昇り龍
と下り龍の確かな技術、これ

だけのものを彫れるのは高遠
石工しかないはずだと思つて
眺めると、台座に「高遠」の
文字が見ええました。久保村松
蔵朝興と久保田浪右エ門充章
が作ったものでした。

高遠を離れた各地で、特別
にできがよい、目に付く石造
物は、高遠石工の作品である
率が高いように思います。こ
れを持ち伝えている側では高
遠石工が作ったものだとい
ことを誇りにしています。技
術が確かで、ブランド名にな
っている高遠石工に仕事を頼
むことは、それだけ費用がか
かります。それでも高遠石工
は代金以上にいいものを作る
という評判を得て、多くの地
から招かれたのでしょう。

このように高遠石工の作品
に接すると、高遠の文化的大
きさを改めて思います。同時
に伊那市ゆかりのものに触れ
ちよつと得をした気分になり
ます。皆様も旅する際に石造
物を視野に入れると楽しみが
増えることでしょう。

(信州大学地域戦略センター長)



台座に見える高遠石工



山家神社の仁王護国般若経供養塔

水牛「イーナちゃん」誕生

白井 温紀

湿原の保全を目的に、太平洋岸沿いの湿原を見張らす牧場を始めました。今年で三年

目。搾乳をして、フレッシュチーズやバターを作っています。昨秋は出産ラッシュで、水牛10頭とブラウンスイス牛1頭が生まれました。

水牛の5頭目は11月7日生まれ。11月7日だから1、7でイーナ。伊那市を思い出す語呂がいいですね。そして、めでたく雌でした。

水牛の子牛は誕生から2週間後に親から離し、子牛舎に移して耳標をつけますが、牛と異なり、自主的に番号を付けます。購入しておいた耳標を、生まれた順に付けていきます。

まず13番はオスで、牧場長が「お前はゴルゴ13だ」とつぶやき、それ以来13番はゴルゴと呼ばれています。15番はイーコ、19番は一休さん、



20番はニレちゃんというふうに、耳についた番号を愛称にしておくと、管理しやすいのです。何しろ皆似たような顔をしているので、毎日世話していても見分けがつかないのです。

さて、「イーナ」の耳標は偶然にも17番があたり、私が名付け親になって「イーナちゃん」に決まりました。つぶらな瞳がきらきらして、よく食べ、とても元気になっています。早春には離乳して、乾し草などをもりもり食べていることでしょう。

まだ先の話ですが、イーナちゃんのミルクでチーズができたら、真つ先に、伊那の皆さんに召し上がって戴きたいと思います。それまで、地域の自然や文化に学びながら、わが湖水地方牧場を守り育てていく覚悟です。

伊那つていいな

鈴木 福

伊那市のみなさん、良い年を迎えましたか？

今年は僕の干支、申年です。良い事がたくさんあります様にお祈りしています。年男、皆さんにたくさんのお福をお届けできるように今年も頑張ります!!

昨年はドラマ10作品、映画2作品に出演しました。

スノーピーの映画では主人公チャーリーブラウンの日本語吹き替え声優を務めました。今年も色々な役に挑戦したいです。

日本中が東京オリンピックに向けて準備をしています。僕は尺八や箏を頑張っていますが、中の人に日本の文化を紹介して、オリンピックを盛り上げたいと思っています。リポーターをする事も夢です!

今までに何度か伊那地方のジュニア和楽器隊の人たちと



一緒に東京で演奏する機会がありました。4年後の東京オリンピックに向けて一緒に頑張りたいです。昨年12月に妹が生まれて4人兄弟になりました。スキーができるうちに家族で伊那に行きたいです。

僕のオフィシャルブログ(Archieブログ)「笑う門には福ブログ」でも時々伊那の事を書いています。毎日更新していますので、ぜひ見てください。伊那つていいな。

(子どもタレント)

申年をむかえて —里地里山の鳥獣被害を想う—

田畑 貞壽

このシリーズを重ねること20回と聞き、今日まで20年続いてきたことに驚くとともに、その間の関係者の努力に敬意を表するものです。

私も過去に何回かこの冊子に投稿させていただきましたが、今年は、年が変わって申年、家族と盃をかわしながら、おふくろの正月料理の味を思い出しているうちに、ふるさと、申年、野生サルと続く連想が、鳥獣被害にまで至りました。

2年ほど前に高尾山(東京)のふもとの集落を一人で歩いていたら、ニセアカシアの花を美味しそうにたべていた25匹ほどの猿の群れに出会い、リーダー格のオスと目線が会ったことがありました。私は、その猿が私のザックに

飛びついてくるのを避けて、近くの民家の人とともに大声をあげて追い返しました。

最近では各地の里山、奥山で、サルばかりでなく、シカやイノシシ、ハクビシン、クマなどに出会うこともありま

す。そして、昨今の獣害対策が如何に大変かを耳にするこ

とが多くなりました。

もちろん獣害は古くからあり、それぞれの時代時代で考案された道具類や狩猟方法を見るのが出来ます。イノシシについては、古くから「ししおどし」などが作られ、飯島町や伊那市の天竜川の西側の里山や奥山の樹林地内に残されているものを見たような

気もします。富士山ろくの西湖周辺にも同様のものがみられます。

また、4については、生物多様性保全の観点から里地、里山、奥山に出現した位置、種数、季節、日時など、克明に記録をとり、将来の鳥獣被害対策の実施計画に役立たせる必要があるなどと提案されていました。

最近の獣害被害の状況は、60年前のそれと比べると、驚くほど増加しており、その原因として里地里山に住む居住者の減少や、農用地の放棄の増加があげられています。

全国で獣害被害についての報告を聞くにつけ、伊那地方で

はどうなっているかを気にしながら、国、県、南信伊那地域でどのような対策がたてられ実践されているかを手元の資料で調べて見ました。

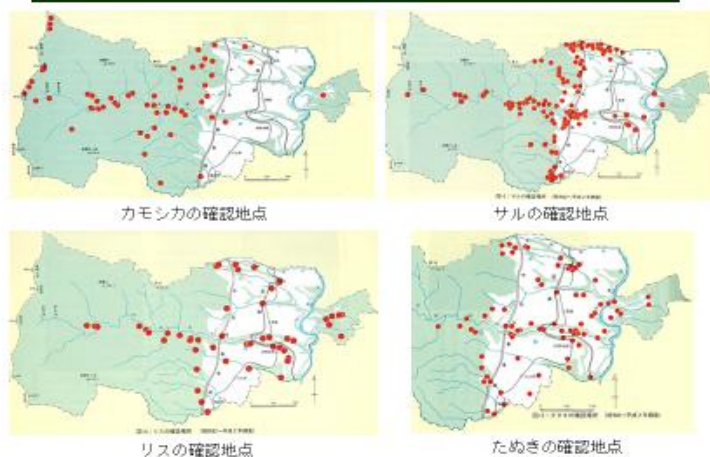
そのうちの一つ、獣害と農村のマネジメントに関係する事例報告として農村計画学会誌2015年12月号山端直人氏が取り上げられている項目には、1・エサ資源の低減、2・隠れ場所の除去、3・効果的な防護柵の設置、4・群れの頭数のバランスをとるなどがあげられていました。以上4項目の中で、1、2、3については、行政と地域の人たちの協働参加と具体的に作業を実施する人の確保が条件となるでしょう。

での鹿対策については、関係者の努力で、調査研究も進み、具体的な手立てが実行に移されているようですが、里山里地といわれる集落では、高齢化や少子化などの影響を受けて大変困っている地区もあるようです。伊那市有害鳥獣対策協議会の報告資料を見ながら関係者皆さんのご努力にもかかわらず、まだまだ多くの問題があることを感じました。

以下は、イノシシ、キツネ、タヌキ、ハクビシンが出没した集落の家に宿泊した時に気づいたことです。伊那市鳥獣被害防止計画に沿って、各人が自主的に防止対策に参加することに加

え、少なくとも今在学の小中学や高校では、環境教育として、有害鳥獣の出没地に関する資料づくりが大切だということ。特に地図化作業を毎年実施することで、それが10年、20年先と貴重な積み上げの有効な資料になります。

カモシカ、サル、リス、タヌキの分布と植生



参考：出没の地図化の例

などを味見し、五感で体験することこそ、生物多様性の保全の学習の第一歩になるのではと思います。是非教育委員会や小中学校、高等学校の代表者の皆さんも伊那市有害鳥獣対策協議会のメンバーに入

って活動して戴けるといいですね。

(千葉大学名誉教授)



同時に、それらの観察や調査が終わってから、ジビエ料理

近作二編

中村 彰彦

昨年は執筆に五年半の歳月を費した長編歴史小説『戦国はるかなれど 堀尾吉晴の生涯』と、二年二月月かかった『疾風に折れぬ花あり 信玄息女・松姫の一生』の雑誌連載を完結させることができた。前者は十一月中旬に光文社から上下巻として刊行し、今は後者を四月中旬にPHP研究所から出版する準備にかかっているところだ。

『疾風に折れぬ花あり』のサブタイトルに名前を出した松姫とは武田信玄の五女であり、かつ伊那市高遠町ゆかりの人なのでそのプロフィールをスケッチしてみよう。

松姫は七歳になっていた永禄十年（一五六七）十月、信玄と織田信長の談合により、信長の嫡男奇妙丸（のちの信忠）十一歳と婚約させられた。だが両家の関係が険悪化した

ため破談となり、その後は甲府にある武田家の本拠地躰躰ヶ嶺館の新館を住居としたため新館御料人さまと呼ばれて育った。

その松姫が天正十年（一五八二）の正月を高遠城で迎えたのは、城主仁科五郎盛信と松姫とはともに信玄の側室のひとり油川夫人を母としていたため仲が良く、招かれて高遠城へ遊びに来ていたのだ。しかし、木曾の領主で武田四郎勝頼に服従していた木曾義昌は、二月一日信長方へ寝返り。三日、信長は二十万の大軍によって甲軍（武田家）を根絶やしにすべく策動しはじめた。

三月一日の高遠合戦に、仁科盛信とその兵力は玉砕。ついで勝頼夫妻も自刃して武田家はここに滅びるのだが、松姫は奇跡的に生き延びることができた。のみならず八王子に草庵を結んで武田家ゆかりの幼い姫君三人を育てたばかりか、二代將軍秀忠の子を懐妊したお静の方を助け、無事に男の子を出産させることに力を尽くした。

その男の子こそこの保科

正之だから、『疾風に折れぬ花あり』は松姫のちの信松尼の物語であると同時に、正之の誕生前史を描くドラマともな

（作家）



伊那谷のアメニティ考

中村 三郎

伊那谷を彷徨うといつも「朝日輝く駒ヶ岳 夕日に映ゆる仙丈の 高嶺の雪を仰がずや・・・」という古い伊那小学校々歌の一節を思い出し

ます。ふるさとを離れ長年余所で生活していた者にとって、伊那谷の美しい山並みと豊かな風情は底知れぬ風土のもつ「力」を強く感じるこの頃であります。

幼児期、朝日に輝く中央アルプスに向って手を合わせていた年寄りを真似て、掌をそつと合わせた時の事を思い出します。また中学・高校生の頃南アルプスの山々を仰ぎ、あの尾根線を全部歩いてみたなどと思っていました。長じて山歩きを試み、数日かけて一人3000メートルの尾根を辿り感激していた時の事を思い出します。先年ネパール国を訪ねヒマラヤ山麓スンコシ河の上流域で、氷河由来の清冽な水を手に汲んだ折、即座に心をよぎったのは南アルプスを歩きまわった時の山と川への想いでありました。

年をとっても伊那の山野における青少年時代の想いが二重写しになっているわけであり

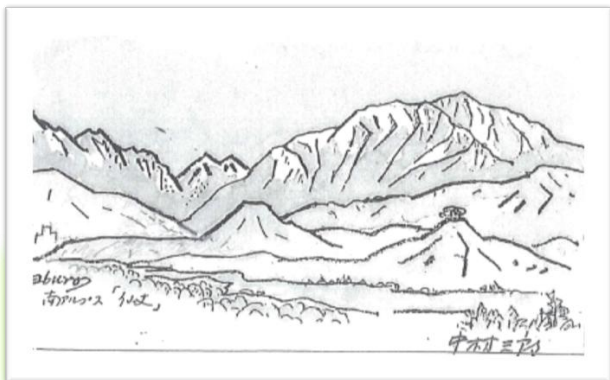
くれています。

地域の風土と暮らしはさまざまな要因によって常に変化します。風土をより良い環境として成立させる主体は私達であります。二つのアルプスとその間を流れる天竜川・三峰川等が育む豊かな自然、山と森の風や川のせせらぎの音は、私達にいろいろなことを話しかけてくれています。先人は、当初自然領域内の中で生活してきましたが、長い歴史の後人間の領域を拡大してきました。今日は農村社会から次第に都市化へと変革しつつある時代ともいわれていますが、この先、伊那谷の自然と人との関わりとその変化が気になります。

1960年代、東京オリンピックの開催（1964）と新幹線・高速道の開通などが大きな切掛けとなり、市街地およびその周縁における土地利用や風情の移り変りが顕著であります。人間には人間の都合があり、時には住むだけ寝るだけの居住域がしばしば目につきます。しかし自然に

は「計り知れない自然の都合」があり、この「計り知れない」都合を追跡することが、今日大きな課題でもあります。経済の発展や人口の増加交通路の整備なども加わり、土地に対する環境観・価値観も変化しつつあり、伊那谷も例外ではありません。居住域も低地帯（一部山麓）から台地、近年は丘陵地における地形の改変がくり返され宅地化が顕著であります。最近経験した長野地附山（1995）・仙台市緑ヶ丘（2011）・広島阿佐区（2014）等における大規模な地盤災害は、いずれも山麓・丘陵地等における大規模な被災例であります。台地周縁や丘陵地において構築される人工改変地と、地球温暖化に伴う最近の異常気象は、災害と背中合わせとなっている訳で、今後は適確に対応しつつ安定した土地の活用を推進したいものであります。中央道を走行し、諏訪湖を右に見て十数分、山間（やまあい）を通り抜けると眼前に伊那谷が開けます。はるか左

手南方向に長大な3000メートル級の南アルプス（赤石山脈）の山なみが眺望できます。更に右西南方向には中央アルプス（木曾山脈）の山塊が展開します。二つのアルプスの合間を天竜川が南方向へ流下し、山塊の前面には広大な扇状地面が発達し、扇面に点在する大小集落の状況は印象深く、伊那谷のパノラミックな景観を一望できます。



この伊那路の見事な風情は、正に中村良夫（2008）先



生のいう文化基盤としての風景街道であります。また初冬の夕暮れ時、南アルプスの山なみを眺望すると「伊那の谷すでに日暮れて 仙丈ハ 明るきまゝに 雪映えにけり」という作家曰井吉見先生の短歌を思い出し、伊那谷の「アメニティ」と風土の深みと美しさの保持を思い念じるこの頃であります。

（防衛大学校名誉教授）

最高裁判所のことなど

―深まった故郷との交流―

那須 弘平

昨年、伊那市の「ふるさと大使」就任のお話をいただき、お引き受けしました。富県村（現伊那市）で子ども時代を過ごし、高校も伊那北に通いました。雄大な大自然と温かな村の人々。伊那は文字通り私の「ふるさと」ですから、よろこんでお受けすることにしました。

ここで、ちょっと最高裁判所の話をさせてもらいます。最高裁判所は皇居西側に面した東京の一等地にあります。裁判官は、それぞれ広い執務室（判事室）を与えられ、来訪者の接遇に使うことができます。私の場合も、親戚や同窓生をはじめとして、たくさんの人たちがこの部屋を訪ねてきてくれました。白鳥市長さんをはじめとする伊那市の幹部の方々にもおいでいた

きました。その際に裁判官室で撮った大判の集合写真は、私の自宅書斎の机の中に大切に保存されています。

最高裁判所にいる間は、外に出て講演などの活動することは控えてきましたが、例外もありました。中でも、実家の近くの公民館で、村の人々を対象とした講演を頼まれたときは忘れられることができません。こたつでも囲んで、お茶を飲みながら雑談をすればいいだろうという甘い考えで会場に赴いたところ、案に相違して、公民館の大広間に、顔見知りの人々がぎっしり並んでいて、交々声を掛けてくれました。故郷の人々の温かい心根をあらためて実感し、感激もしました。

退官後は、伊那近辺で話をする機会がさらに増えました。中でも、高遠城址の高遠閣で、内藤家の嫡流である頼宣氏をはじめとする主従・幹部の御子孫など、書物の中でしたか名前を拝見したことのない歴史上の人物の流れを汲む関係者と親しく歓談することが

できたのは、実に貴重な体験でした。

最高裁判所判事就任を契機にして、これほどまでに故郷との絆が広がり、強まろうとは思ってもみなかっただけに、故郷に対する感謝の気持ちも一層深いものがあります。ありがとうございました。

(弁護士・元最高裁判所判事)



母と「ハナノキ」

新村 洋子

私は新卒新任の地が旧長野県西筑摩郡山口村神坂馬籠（みさか）という所でした。ここが母の故郷だったので母は大変喜び

何度となくここを訪れました。私は職員住宅のある馬籠の宿から岩田、峠に至る道が気に入りの散歩道になりました。

岩田に至る少し手前の下り坂川のほとりに母の実家跡、今は村営の水車塚公園となっ

ている所があります。そこを訪れたとき母は「水車塚」の背後を指差して「ここにはハナノキの大きな木があつてそれはきれいだつた。誰かがどこかへ移植したのだろうか。」と言っていたことがあります。

私はまだ見たことも聞いたこともない「ハナノキ」という名前だけは良く覚えていてどんな木かなと想像していました。

ところが3年前に転居した

国分寺市の私のマンションのまん前の都立武蔵国分寺公園で「ハナノキ」と名札のついた大木を見つけました。注意して観察していると春サクラの咲く少し前、えんじ色の小花をいっぱいつけた見事な大木で、何の花か誰に知られることもなく咲いていました。

私は思わず近くを通る人々に「これ、ハナノキっていうのよ。」と、ふれ回りました。

ネットで調べたところ「ハナノキ」は氷河時代の生き残りの木で、日本では岐阜県と長野県にまたがる恵那山を中心に半径30kmの所のみに自生する貴重な木だということが分りました。

私はあの時の母の言葉を聞き流さないで四季折々のその美しさや、ハナノキの周りで遊んだ友達のこと、亡くなった家族のことなどを詳しく聞いておけばよかったと悔やまれてなりません。

(写真家・絵本作家)

水車塚の石碑

明治37年の水害時、この地

で水車屋を営んでいた蜂谷一家四人が鉄砲水被害で亡くなった。私の祖父蜂谷義一は、当時長野野師範学校在学中、義一の妹宮下志げは一足先に村人に負われて避難し難を逃れた。後に、親交の深かった島崎藤村の揮毫で「山家（やまが）にありて水に埋もれたる蜂谷の家族四人の記念に」島崎藤村しるすの碑文が刻まれた。裏面には碑陰として「信濃の国」の作詞者で、蜂谷義一の友人浅井冽が9行の文を記している。



水車塚の前にて 亡き母と私

4色ボールペンの笑顔

野溝 友也

2014年に個人旅行で滞在したブータン。帰国後、その経験を活かし幾つかの企画を幾つかの局に提案し、ひとつが無事採択されたことを秋に知る。ところが放送に間に合わせるにはどう考えても年末年始を潰して滞在するしかない。急ぎ現地と連絡を取り2015年の12月から翌年の1月まで、1ヶ月間のロケが確定した。

その中で現地のガイドと激しくぶつかるシーンがあった。今回、ある村の農家に宿泊させてもらった。両親と小学生の姉妹。素朴な笑顔にホッとさせられる。この笑顔を撮影するためにボクはこの国に戻ってきたと心から思う。

農家への滞在最終日、ガイドから農家の方にお礼を支払ってくださいと唐突に言われる。公定料金の中から対価としてのお金は十分に支払われ



ているはずだ。

ブータンにやって来た外国人は取材であろうが一律の公定料金を支払う。1人1日およそ250ドル。その中には食費と宿泊、移動にかかるお金、ガイドやドライバーの費用が含まれる。滞在した3日で、ボクらは10万円を超える金額を農家に支払っていた。首都の公務員初任給が2万円程度の国。そこで10万円は農家にとつてかなりの金額になる。さらにお礼を払えば……

かつて日本のテレビ局、テレビ番組は、観光客も訪れたことがないような場所を取材し、お礼にと、街に行けば好きなものと交換できる「不思議な紙」を渡した。それまで

になかった貨幣経済をその土地に持ち込んだことで文化や価値観が変わり、多くの若者が土地を離れていったそうだがその轍を踏みたくない。

ガイドは僕が「謝礼」を支払うことで次も同じ農家に別の観光客を連れて来ることができ、いい顔ができると考えたのだらうか。頑なに拒んだ

ことでその後ガイドとは、残念ながら元の関係に戻ることはできなかった。

ブータンの価値観、農家の価値観、ボクの価値観……何が正しいのか、どうすればよかったのか、その正解が無いことはわかっている。初日にボクがおみやげとして渡した4色ボールペンを宝物のように取り出し、覚えたばかりのひらがなで「ともや」と書いては見せてくれる農家の姉妹。彼女たちの笑顔をどうしたら支えられるのか。そんなことを考えた年末年始だった。

(テレビディレクター)



少年の楽園と戦争 未亡人

原 克

「コウセイチバに、行かん?」。

放課後、ソフトボールに飽きると、だれかが誘った。そのひとことで、堰を切ったように、少年たちはグローブを投げ上げながら、伊那小学校の坂をかけおりた。めざすは、旧市役所裏の路地にあるコウセイチバだ。

旧市役所の裏路地。現在はキレイに整備されている。が、東京オリンピック前夜は、道端を流れる川の上に板をわたし、路地づたいにずっと、雑貨屋やトンカツ屋が、低い軒をならべていたものだ。通称「コウセイチバ」。少年たちの楽園だった。

正式には「公設市場」。聞けば、戦争未亡人たちへの支援だったとも。そういえば、雑貨屋のおばちゃんはみな、い

つもひとりで店番をしていたものだ。

お目当ては一回五円のクジ。一等賞は長嶋が大鵬だ。悪い紙質にズレた印刷の、ちっちゃなプロマイド。ハズレは、古新聞を糊づけただけの小袋に入った甘納豆。ほんの数粒だ。

「ナガシマはもう持つてるから、イイや」。ハズレた負け惜しみもそこそこに、路地端で、甘納豆をもったいなさそうに、みんなで舐めた。母に知られたら、不衛生だと、きつと叱られるに違いなかった。少年たちはみな、敬愛をこめて「コウセイチバ」とよんだ。「公設市場」と言える者はひとりもいなかった。言い間違いだ。

フロイト『精神分析入門』(一九一七年によれば、「言い間違ひ」は、抑圧された無意識の欲望だという。なにもフロイトを持ちだすまでもない。だがしかし。

なるほど、コウセイチバは不衛生で、混乱していた。しかし、戦争の影のせい、ど

こか厳肅で非日常的であり、少年たちの心の奥のとても大事なところに、けっして忘れてはいけない記憶を、そっと刻んでくれていたのではないか。

あのコウセイチバは、ひとり少年のそれではなく、時代そのものが抑圧しようとした社会的無意識だったのかも知れない。

(早稲田大学教授)



日本語で話しかけてきた人々

丸山 敬一

一九八〇年代の日本は、まさに日の出の勢いで「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と讃えられたり、「二一世紀は日本の世紀だ」と明るい予言をされたりした。大学院を志望する外国人受験生たちは、志望理由を問われると「非ヨーロッパ世界の中で唯一近代化に成功した日本の秘密を学びたい」と異口同音に答えたものである。八十一年から翌年にかけて西ドイツ（当時）・マンハイム大学で研究生生活を送っていた間、私はしばしば直接日本語で話しかけられた。マンハイム駅で切符を買おうとしていると、やおら「さよなら」といわれたり、ミュンヘンの駅でウィーン行列車に乗り換えようとしていると、東京の下町に住んでいたのだなと思わせる日本語を話す中

年女性に会ったこともある。それらの人々の中で特に印象に残っているのは、オーストリアのリンツで開かれた国際学会の帰りに私に話しかけてきたユダヤ人男性のことである。

周知のように、ヨーロッパの鉄道には三つの席が向い合せになって一部屋になっているいわゆるコンパートメント方式が多い。その時私のいたコンパートメントには中年男性が一人座っていたのみであった。彼が突然日本語で話しかけてきた。「私はユダヤ人である。第二次大戦当時世界でユダヤ人を受け入れてくれたのは中国の上海のみであった。私は家族と共に上海に亡命し、そこで日本語を習った」と彼はいった。戦後四〇年もたっていたので、彼の日本語もずいぶん怪しかったが、初めから怪しい私のドイツ語と彼の日本語とで何とか意思疎通しながらチューリヒまで来た。彼は「私はこのILOで働いています」といつて降りて行った。彼の背にこの民族の

背負った二千年に及ぶ長い苦難の歴史を思った。

バブル崩壊後の「失われた二〇年」に苦しむ日本に代り、いわゆるBRICS（ブラジル・ロシア・インド・中国・南アフリカ）が台頭してきて、国際社会における日本の地位も下り、日本に対する世界の関心も次第に低下してきていると聞く。外国にいる日本人留学生たちは直接日本語で話しかけられることが今でもあるのだろうか。

（中京大学名誉教授・法学博士）



日韓友好の願い

三沢 節夫

我が伊那市のほかに、日本の各地に「イナ」という名前が付いた土地がある。茨城県の伊奈町、愛知県の稲武（イナブ）町、三重県の員弁（イナベ）町などである。インターネットで調べると、「イナ」は朝鮮半島から渡来した技術家集団の猪名氏に由来しているという。日本には大和朝廷成立の頃から、陶器・農具・武器・織物・馬などの生産に従事する技術者たちが渡来してきて定住した。古代、豪族たちは自分の勢力範囲を「・・・部」と呼んだが、猪名氏は、初め、現在の大阪府の摂津に「猪名部」をつくり、これが、その後、日本全国に広まっていった。「伊那部」もこの流れの一つで、天竜川に沿って北上してきて、三峰川との合流点である肥沃の地に猪名部をつくった。今はこれが伊那部となつて、伊那市の竜東地区の地

名となっている。伊那市の歴史を築いたのは朝鮮半島から渡来した人びとの力であった。日本と韓国（朝鮮）とは外交的には緊密な時代もあった。

しかし、一九一〇年の日韓併合以来、その関係が平穏であった時期はあまりない。日本が韓国の社会の近代化にかなり貢献したという説もあるが、一方で、創氏改名とか日本語教育の強制、日本資本主義のための労働者の強制徴用など負の側面も少なくない。日本の太平洋戦争の敗戦により、韓国は独立と自由を獲得した。しかし、35年間にわたる日本帝国の支配に対する韓国民衆の怨念は簡単に消えるものではない。

日韓関係のトゲは従軍慰安婦問題である。2013年、第2次安倍内閣が発足すると、安倍首相は「軍の強制を示す公文書がないから、従軍慰安婦問題は存在しない。河野談話を替えたい」と発言した。これは、韓国だけでなく、アメリカの議会と知識層から強い反発を受けた。「アベの保守

主義がまた顔を出した」と。

この問題の本質は、元外交官の東郷和彦氏も云っているように、強制文書の有無ではなくて、慰安婦ひとりひとりの人格を踏みにじったことにある。何も問題がないというのなら「あなたの奥さんや娘を従軍慰安婦にしますか」という問にどう答えるのか。

いま、地球の上では、シリアでイラクでパレスチナで無辜(むご)の民への限らない殺戮が続いている。しかし、この世紀の危機を救える政治家は一人もいない。世界が平和でないならば、まずは身近な所から平和を築くしか道がない。日本は韓国との友好の輪を築こう。そして伊那市は、韓国に親戚のようにつき合える都市を見つけて、そこと友好都市の関係を結ぼう。相手の都市を訪問したり、また歓迎したりすることで、人びとは、みんな、喜びと悲しみをもつ同じ人間であることが分かってくる。そして世界は少しずつ一つになっていく。

(日本大学名誉教授)

日本の留学生が激減している！

三澤 満



ハワイ大学経営学部大学院教授として教鞭をとって久しいが、最近、日本からの留学生が激減していることに大きな懸念を持っている。その傾向は、米国大学一般で見られる。学問の世界の中心地、米国には、世界中から優秀な学生が集まり、その数は年々増加している。特に、インド、中国、韓国等のアジアからの入学者数は飛躍的に増加している。一方、日本人入学者数は、2000年以降50%以上落ち込んだ。現在、韓国の留学生数は日本の二・五倍と言

われる。この現象をどう捉えるべきだろうか？個人の留学目的、意識、意欲の変化に加え、国情や社会的状況の差も挙げられる。具体的には以下が考えられる。

(1)まず、英語力の不足である。ハワイ大学の入学条件としてTOEFLテストで550点が必要だが、これをクリアできる日本の学生は少ない。平成23年度から実施された新学習指導要領により、小学校5、6年生に外国語教育が導入された。これは日本人学生の海外留学に必要な語学力を向上させる基礎としても重要である。

(2)日本人若者の「草食化」が言われる。リスクを避け、自分の世界で満足しようとする傾向があると言う。結婚しない、子供をつくらない意識と共通のするようだ。日本の留学生は、もともと企業派遣が多かった。しかし、ビジネススクールへの企業派遣は近年著しく減っている。その背景には最近の経済情勢に加えて、「留学後すぐ転職する」とい

うドライな若者達の行動も影響しているようだ。

(3)中国や韓国では、母国に帰れば良い待遇の職が与えられるのに対して、日本人学生にとっては、そのメリットが少ないと受け止められている。これは、いまだ、基本的には終身雇用、年功序列のシステムを温存する企業側にも責任がある。

理由はともあれ、これではいはずがない。世界のグローバル化が進む中で、日本だけが取り残されることになりかねない。国際的に通用する人材育成の機会を与え、国際感覚や研究能力を磨き上げ、また広く世界の人的ネットワークを形成する上にも、若者の留学は是非必要だ。そのためには、若者たちの意識改革はもとより肝要であるが、大学をはじめとして、国、地方自治体、企業でも海外留学のための奨学金など、その支援制度を一層充実することが望まれる。

(ハワイ大学経営学部大学院教授)

ふりむけば古代史

宮原 照夫

埼玉県に毛呂山町という地名がある。町村合併の前は毛呂村と言われていた。クロ(村)ではない。モロ(村)と読む。町の北側には越辺川という川があり、南側には高麗川が流れている。この川の読み方はオッペ(川)、コマ(川)である。西へ進むと此企丘陵の川並みが下りてきていて山すそにぶつかり、まさに町と山が溶けこんでいると言った佇まいである。

毛呂の先には越生町がある。これはオゴセ(町)と読む。左、飯能方面へ行くと、高麗川の上流に幽寂な山中に高麗神社がある。知らない人は知らないが、知っている人にはかなり有名な神社だ。

高麗、毛呂、越生—もうすでに気づきのことと思うが、この辺一帯は、箱根山の開発に尽した貢献が認められ、朝鮮三国の一つ高麗から渡来人

に与えられた「高麗郡および周辺」という古代史ゆかりの地なのである。じつはこの中の毛呂に、私は三十年前に居を構えたのである。もともと古代遺跡が好きで会社からメキシコのマヤ遺跡、ペルーのインカ遺跡へ行かせてもらうなど、もっぱら海外に目がむいていたが、今は身近な遺跡に触発され、日本の古代史文化にすっかり魅せられてしまったようである。

金達寿「日本古代史と朝鮮」「古代朝鮮と日本文化」、その論理にややエキセントリックなきらひはあるが、なかなか面白かった。宮脇俊三「古代史紀行」も好著だ。中国・朝鮮とのかかわりを追究していた梅原猛の「聖徳太子」を読み法隆寺にくわしくなった。
(元週刊少年マガジン編集長)



最近思うこと

山北 一司

厚生労働省によれば2014年の日本人の平均寿命は、男性80・50歳、女性は86・83歳とともに過去最高を更新したといえます。男性は世界第3位、女性は世界第1位です。

ニッセイ基礎研究所は、昨年8月26日付で「長寿国日本は、天寿をまとうしやすいか——他殺と自殺の状況から——というレポートを発行しました。他殺と自殺の状況について、日本とG20の国々について調べています。他殺者数は、日本が圧倒的に少なくG20でトップの状況。日本の年間の他殺者数(人口10万人あたり)は、0・3人であり、第2位のインドネシアは日本人の倍の0・6人という状況。日本は、犯罪に巻き込まれずに、断トツで天寿をまとうしやす国です。

一方、自殺者数は、日本はかなり多く、G20で第16位

という状況。日本の自殺者数は18・9人であり、他殺者数0・3人をはるかに上回る状況。

五木寛之さんは、近著『自分という奇蹟』の中で、「かつては1万人を超え、政府が『交通戦争』と規定していた交通事故の死者は、今では1年間に4113人(平成26年)に減少しています。では、その6倍以上にのぼる人が自ら死を選ぶ、そのことを一体何戦争と言えいいのか」と書かれています。そしてこう記されています。「ある意味で、これは戦争なのです。それは『心の戦争』であり、インナーウォーという言葉がぴったりくるかもしれません」。

内閣府が実施している「国民生活に関する世論調査」というのがあります。1976年に初めて「物の豊かさ重視40・1%」に対し「心の豊かさ重視41・3%」となりました。平成27年の発表では、前者が31・9%に対し、後者は62・0%とほぼ倍の人々が、心の豊かさを重視する時代です。

このことは、生涯学習や生

活様式が文化芸術に関わることに現れていると思います。日本社会におけるトップランナー群に位置する伊那市にますます興味を抱いています。最近の文化政策ではこの心の豊かさを幸福という言葉に置き換える人もおられます。

(芸術文化普及研究家・生涯学習
上級コーディネーター)



イーナ・ムービーズ～なつかしい未来～

長野県伊那市の魅力を映像で発信！



「住みたい田舎ベストランキング」宝島社「田舎暮らしの本」において、「子育て世代にぴったりの田舎部門」2年連続全国1位に選ばれた、長野県伊那市では、豊かな自然や子育て環境等の魅力を発信するため「イーナ・ムービーズ なつかしい未来」をテーマに、プロモーション映像を制作しています。

「イーナ・ムービーズ」をぜひご覧ください！



イーナ・ムービーズ

検索

<http://i-namovies.jp>

